
The Creator—**終焉のラグナロク**—

利瀬 時夜

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

The Creator――終焉のラグナロク――

【Nコード】

N0581Z

【作者名】

利瀬 時夜

【あらすじ】

これは、どうしてこうなった、から始まる俺の物語。

まあ聞いて欲しい。俺は普通な男子高校生だ。魔法も無ければ超能力も勿論使えない無能で普通な男子高校生だ。

そんな無能で普通、友人A級の脇役伽羅な俺が何で異世界何ぞに召喚されなきゃならん？ 何ぞこの展開。

最初は信じられなかったね、嗚呼、夢だっと思ってた。夢じゃなかったら俺の作り出した妄想だっと思ってた。

でも夢でもなければ、妄想でもなかったって言うね。最悪の一言に

限るでしょ、これ。

で、俺を召喚した国は勇者を求めていたみたいで、世界を平和にする為に協力して欲しい、との事。

平和になれば還れますか？ いいえ、還れません。最悪だね、やっぱり。

嗚呼、俺是最悪な星の元に産まれたのかな？ まあ何れにせよ、やらないよ、俺は？ え、面倒じゃん？ 死にたくないし。

しかし、そんなある日、俺の運命は270度、変わってしまう。

これは俺の愛と勇気の物語。へ？ 違う？ いや、そうだろ。だって大事な人も出来た、大切な物も出来た、護りたい居場所も出来た。なら愛と勇気で良いんじゃないやね？ 主人公最強異世界トリップファンタジー 此処に開幕。乞うご期待

R15程度に性描写や、残酷な表現描写が含まれます。苦手な方は即座にバックブラウザ。

主人公無双、ヒロイン無双は多々あります。不定期更新、文章稚拙、誤字脱字がありますが、ご了承下さい。

作者は指摘でも感想でも入れられると泣いて喜びます。それでは暇潰しにでも、どうぞ御覧下さい。

登場人物紹介（随時更新）（前書き）

あの、そろそろ泣いても良いでしょうか？

再びブツチ↑

原因が登場人物からやれやタコと言う事で……。

友人怖いです、はい。

それでは、はい、どうぞ、はい。

登場人物紹介（随時更新）

Ⅱ登場人物Ⅱ

名前：佐久間敬一 | Keiiti Sakuma |

真名：伊邪那 | Izana |

年齢：18歳

身長：174cm / 55kg

容姿：黒髪黒眼華奢克細身の女顔故に『女みたい』と言われるとキ
レル

職業：高校生

属性：正義、秩序、卑怯

教訓：『君子危うきに近寄らず』

能力

デイドリーム・クリエイター

『創始創造』

ディノスフェル・デイスティヴァー

『不死身軀』

宝具

我纏う限り無き誇りよ、姿を現せ——『無限の器創』
アンリミテッドランキライザー

恩寵を以って貫きし者よ、繰れ——『轟戟神槍』
ザ・グングニール

背護る者へ己が力を、前戦う者へ我が命を捧げよう——『別与伝得』
アハトヘルト・インフォルティアーゼ

快樂悦樂、思うが故に迸る淡く儂き一夜の夢よ、永久に続く為に、

全てを染め上げる——『歡喜樂園』
パラダイス・サ・エデン

我が剣を我が盾となる事をその身を以って痴れ——『主従関係』
マスター・オフ・サーヴァンツ

宿れ目をも穿つ眩き煌きよ、我栄光を刻む者なり——『陽煌輝弓』
シャカン・シェキナー

虚空を彷徨う箱より出でる破滅の力よ、天を覆い、地を焼き払う悪

魔の力よ、我が手にその身を曝け出せ——『害為す魔剣』
レイヴァー・ティン

性格

余裕綽々、飄々とした態度が特徴的で、天才的なまでの器用。

宿っている創始創造の能力で宝具を作り出してしまおう等イレギュラ
ーな一面も見られる。

顔立ちが女顔なので、女みたいと良く言われる。温厚で人当たりの良い人物。

運動神経も頭も悪いわけでは無く、並々。特筆すべき点は特に無く、悪い点も無い普通の男子高校生。

極ドS変態鬼畜悪魔と言われるが「その通り」と言って受け流す等スルースキルを得ている。

自分の大切な物、大事な人、護らなければいけない居場所は命を掛けてでも護る1人の男。

神話、宗教、伝説、世界史等に興味を持っている為、様々な点に脳が働く切れ者でもある。

天性の戦闘センスを持っており、普段は優しく飄々としているが、当時中学時代荒れていたと言う経歴もあり精神内に？壊殺鬼？を宿している。

極度のショックを受けると変貌し、口調は挑発的克飄々と、ポエマーとなり、相手を殺す事を快楽として直結する様になる。

ツッコミ役として稼動し、ボケには回らない。

名前：水瀬朔夜 | Sakuya Minase |

真名：十六夜 | Izayoi |

年齢：16歳

身長：154cm / 不明

容姿：藍色のポニーテールに藍色の深い黒い瞳。華奢克細身ながら美少女。

職業：高校生

属性：正義、正々堂々、秩序

能力

ヴァルキュレイト・ヴァルキュリー

『戦場死体』

宝具

乱れ狂えよ、その香りで我を勝利へと誘い導け——『勝利誘導剣』

宙に舞い咲け、降り注げ——『槍戦』

ゲイル・スケルグ

ブリュン・ヒルデ

空を喰らい蝕み、食み果てる——『武斧時代』
スケツギオールド

響け騒がせ纏い食い散らかせ——『武騒装音』
エルディ・フレック

穿ち貫きし者達よ、進み進んで貫き通せ——『槍持進軍』
ゲイ・レルル

地に残しし御伽噺の天破槍よ、我痴れ汝痴れ、そして我に纏い降れ

——『神残真槍』
レギン・レイヴ

覆い囲う光の妖精達よ、我等を護る剛健実質と成りて眼前に現れよ
ジアルド・ヘルヴォル

——『軍勢守護』——

性格

能力の名前を忌み嫌う二人目の勇者。

強気克弱い所を見せないで有名な勇者だが、実際は弱く、脆弱で、泣き脆い。

リーダーシップを張れる人物で、中心的存在になれる人物。まさしく主人公と呼べる人材。

自分の誇りを汚される事を嫌う、真つ当な騎士道を生きる事を誓った。

勇者としては精神面が脆い一面も見られ、特攻タイプなので、脳筋といわれる場面もある。

敬一以上の天性の戦闘センスの持ち主で、頭は悪いが運動神経は抜群。

ブリュンヒルデを苦も無く振り回す事が出来る上に、両手に槍と剣の奇妙な二刀流を扱う事も出来る。

存外イケメンを求めているわけではないらしく、男らしく、格好良ければそれで良いらしい。

名前：エリシア＝エルキュアーゼ

年齢：18歳

身長：157cm / 不明

容姿：淡い紫混じりの銀色の髪に紫色の瞳をしている

職業：メイド

属性：正義、ツンデレ、秩序、主人愛

種族：『人間^{ヒュエム}』

魔法

フルグランツ・フルグラティオー

『極零凍結』

ヴィディアンテ・ダンシユーマ

『疾風乱舞』

性格

氷と風の魔法を扱う城のメイド。

美少女の類に確実にカテゴライズされ、胸の事を指摘されるとキレる。

ツンデレで、人当たりが良く、温厚克優しい為女性からも好かれる人物。

仕事に関しては最初の頃は酷かったと言う。

主人に尽くす事を専念し、それこそ主人を裏切る事は絶対にない。撫でられる事、キスされる事を好み、普段は冷静沈着克毒舌でもある。

名前：イデアⅡサターシアンツ

年齢：17歳

身長：162cm / 秘密

容姿：金色の長い髪に碧眼。

職業：騎士団第一総長

属性：正義、秩序、平和

種族：『人間^{ヒュエム}』

魔法

オルズマイ・ヒルディアート

『肉体強化』

特技

『王国流剣術』

『我流剣術』

性格

『サターシアンツ』侯爵家の娘であり、相当な剣術の使い手。

気高く孤高だが、実際脆弱で脆い。朔夜に似ており、それでいて騎

士道精神全開。

敬一曰く「面倒な相手」だと言う事。彼女もまた撫でられる事、褒められる事が好きで、自分の事を女性と思ってくれる人物を探していると言う。

剣術では王国一だが、世界は広く、実質敬一に敗北している。

『サターシアンツ』侯爵家と言えば有名で、必ず子孫は『最も強き者』として生まれ、戦場で活躍し、名を馳せる。

言ってしまうえば戦争の道具である。しかしそれに気付かぬ息子や娘達は皆、戦場で散って行く。その様に彼女はある人物を尋ね出家をし、彷徨っていたと言う。

名前：クレアーフィル・ヴァンティエキュート

年齢：17歳

身長：156cm / 不明

容姿：赤茶色の髪にブラウンの瞳

職業：城内総料理長

属性：料理一筋、正義、ツンデレ

種族：『妖精^{エルフ}』

魔法

^{メルフ・エルフェランテ}

『火焰業火』

『大地鼓動（エアジス・グロースエアレリック）』

性格

炎と大地系統の魔法を扱う、城の中の厨房内総料理長を務める美少女。

頭も良く、運動神経も並々。

浅はか過ぎるツンデレで、皆の前ではクール冷静沈着その物。耳が弱点である事は既に敬一にバレていたりする。

ツンツンばかりでデレる一面や可愛い場面が見られないと言うが、実質、蟲が嫌いと言う可愛らしい一面を持つ。

名前：リーラⅡゲシュタルト

年齢：15歳

身長：151cm / 秘密

容姿：藍色混じりの灰色の長い髪に、猫耳と尻尾持ち。藍色の大きな瞳をしている。

職業：メイド

属性：花壇大事、正義、デレデレ

種族：『^{アニシエル}獣人』

魔法

『雷撃稲妻（サンディアⅡブリッツェル）』

『邪傷治癒（ホーライトⅡヒーリングペア）』

性格

猫耳猫尻尾持ちのメイド。しかし耳と尻尾は猫故弱点。

城内でもマタタビ使用禁止が出ている。運動神経は良く、聴覚に優れている。

跳躍力が半端では無く、滞空時間も3秒近い。

甘えん坊の撫でられ好き。不定期だが発情期に襲われた場合は即急の避難が必要とされる。

猫故か運動神経も良く、実質語尾に『にゃ』が付く場合がある。

名前：ミアⅡシャルドⅡアクティアⅡトリエニスタ

年齢：17歳

身長：155cm / 秘密

容姿：クリーム色をした金色の長い髪に碧眼。

職業：トリエニスタ皇国姫君

属性：正義、婚約発言、秩序

種族：『^{ヴァルクルギス}吸血姫』

魔法

『ブラック・ラ・ダークネス』

『漆黒闇夜』

『バーフェクトリィ・ゼロニズム』

『絶対零度』

性格

普段は幼女体系だが、満月の夜のみに完全な姿、所謂姫君へと変貌する吸血姫。

皇国の姫君であり、主人公を召喚した張本人。

ぶっ飛んだ発言をするが、本人曰く「自分の本音を伝えただけ」との事。

闇と氷を使用し、凍らせ、闇に沈める等と言う芸当も出来る。

気高く、孤高ながら、デレる時はデレ、厳しい時は厳しい人物。

本気で怒られるという経験が無く、怒られると泣いてしまう一面も。案外寂しがり屋な一面も見られ、可愛い等と言われると照れたりする。

物語用語紹介（随時更新）

ⅡファイアデルファイアⅡ

本作の舞台となる異世界。

魔力が主力の世界で、科学技術は一切存在しない。

五つの大陸より構成されており、

？東方国家群

？西方国家群

？北方国家群

？南方国家群

？中央国家群

と言つ具合に別れ、成り立っている。

中央国家群は主に『国家群の中でも主力国家の王、或いは皇帝達による会議』を行う為の場所であり、機関。

フロ・エンペシアシステム

『護帝機関』と呼ばれるそれぞれの国家の様子を見守る国家主力最強主も存在するが、滅多に顔を出す事は無い。

ルシア・オブ・ウオーヴ・エクティアーヴ

Ⅱ軍神使用禁止令Ⅱ

ルシア

軍神と呼ばれる軍を司る戦の神の召喚を禁止する条約。

止む終えない場合は中央国家群の王に頼み、許可を出す事によって使用許可が出される。

例えるならば軍神にも種類があり、炎を司る軍神、龍型軍神などで使用方法が異なる。

召喚する存在が強大であれば強大である程、使用許可は出難い。

Ⅱエクトリアス帝国Ⅱ

東方国家群西部を支配する強大なる軍事国家。

覇権主義を掲げた帝国で、東方国家群完全統一に乗り出す。

魔法技術、軍事兵器技術技術関係どれに置いても最優秀である。

「アーククライズ王国」

東方国家群南部を支配する覇権主義国家。

豊かな農地と水流を得た為、水産業と農業が主力となっている。

西をエクトリアス、北をカメルディアに挟まれており、戦乱が耐えない。

実質軍事関係に置いてはエクトリアスに一步譲るも、策では勝るとも劣らずだと言う。

城壁は最新鋭の対魔物避け結界が張り巡らされている。

「カメルディア王国」

東方国家群北部に位置する自然国家。

周囲を樹林、砂漠に囲まれており、魔物の侵入を避ける為に魔物避け結界を張っている。

しかし樹林、砂漠が有る為に農業については困らず、水産業についてもアーククライズより輸入する時があるので困らないと言う。

豊富に産出される貴金属非金属を輸出しており、その中でも鉄鉱石の産出量は東方国家群一である。

「トリエニスタ皇国」

東方国家群最北部を支配する覇権主義国家。

エクトリアス帝国とは現在冷戦状態であり、諸国家群と同盟を築いており、完全支配を目論む。

『ディアック同盟』と呼ばれる『戦争時には協力する代わりに、食糧や物資を諸国家に提供する』と言う同盟を結んでいる。

戦争撲滅を考えており、掲げているのは『戦争根絶』で、国家の中でも最も平和主義な国家でもある。

「エスカンティア王国」

東方国家群東部に位置する最後の覇権主義国家。

実際其処まで覇権主義争いには入ろうとはせず、隙を窺っている。周囲には峻険な山々が聳えている為、国に来るだけでも容易では無い。

天然の防壁とでも言う様に雪が山頂に積もる為、雪崩が良く巻き起こる。

東方国家群中央部への侵略を目論んでいる。

〓 シャンカティア半島 〓

東方国家群の中でも最東部に位置する無法区域。

森林地帯で、魔物が多数出現し、危険区域として指定されている。史記の持つ領土であり、土地。

己の住む居場所であり、それでいて軍事拠点として置いてあり、魔物も全て一層したらしい。

〓 魔力 〓

フィアデルフィアの主力動力。

魔力による兵器操作や、魔力による魔物避け専用結果。

或いは空を舞う舟？飛空艇？の動力源、空を舞うバイク？空舞車？
の動力源としても使用される。

炎を起こす程度ならば魔石と呼ばれる魔力の秘められた結晶を使用すれば良いが、電力水力問題はまた違う。

電力は巨大な魔水晶と呼ばれる魔石の上に存在する莫大な魔力を保持する結晶を使用し、水力も同じで、これを国の何処か安全な場所に保管すれば完成である。

後は水道管や電線を繋げれば完全に国家として成り立つ。

魔法として使用する場合は？起源言語詠唱？を刻み紡ぐ必要があり、自然干渉を絶対とする。

シエロツール
〓 天鍵 〓

魔水晶破壊時に使用する『天より捧げられし鍵』。

魔水晶に触れるだけで破壊可能。

しかし、破壊時の衝撃は大きい為触れた瞬間に回避行動或いは防御行動を取る必要がある。

Ⅱ 術式解放Ⅱ

法術（完全に決められた方式からの術式解放）や連術（連続での術式解放）時に行われる連続魔法。

問題点としては放つたびに莫大な魔力を消費する事でもある。

Ⅱ 尾鰭引く双魚の刃Ⅱ

エアエリック ツウアイ ドラグーン

空中国を行える部隊のみに告げられる命令。

空中からの攻撃を加えつつ地上への進軍をすると言う同時並行時に使用される。

が、まずは空中からの攻撃中に攻撃を喰らい、飛龍や鳥龍達が混乱を起こした時点で失敗となる為、一人囲を必要とする。

その場合、最も戦場で最前線を駆け抜け抜ける人物が適材適所される。

Ⅱ 革命軍Ⅱ

レヴォイト・ディレストラクチャー

奴隷制度、人種差別などと言う人権に背いた制度や武力、決まり事、規定に対する反乱組織。

一組4名で構成され、必ず一組に一人は部隊自体を仕切る事の出来る人物を取り入れる。

魔法、遠距離、近距離、空中部隊でそれぞれ別れる為、仕切るには相当な人材が必要である。

スカレット・クロス

Ⅱ 紅十字Ⅱ

反帝国組織団体。

壊滅された村の人間、街、町の人間達が集まって創られた特殊部隊。人数は相応で、数百人程度でもある。『帝国に聳える巨大な十字を

真紅に染め上げる』と言う事から名付いたと言う。

遠距離と魔法に優れており、近接は余り優れているとも劣っているとも言えない物がある。

ソード・オフライト レフト・オフシールド
〃 右手に剣・左手に盾 〃

王国帝国の公認組織。

主に王国帝国皇国の治安維持、政治経済へ役立つ為の行動を起こす事が仕事。

年齢は10代から40代まで存在し、その年齢層の幅広さは通常の騎士団隊を優に超す。

歴代騎士団長は皆戦場で散ったと言うが、第19代目騎士団長である？リケア・イーヴオンバツ？は必ず戦場へ生きて帰ってくる？不死身？と呼ばれる男である。

〃 I S T S (I n f i n i t e d S i s t e m T h e S e k o n d) 〃

帝国の空中要塞。他にも F S T F (F r e e d o m S i s t e m T h e F i r s t) や D S T T (D h i s u t h i n y S i s t e m T h e T h e r d) が存在する。

それぞれが『無限』『自由』『運命』を象徴しており、数も相当な物。

最終兵器としてはまだ思案中らしいのだが、製作途中と言う情報もあり、不明な状況とも言える。

第00話 変わる今と終わる現実

最早唐突としか言いようがないが、先に言わせて頂きたい。

俺は普通に健全克一般高校に在学する一般的な男子高校生である。

それはもう誰が何と言おうと一般的な男子高校生だ。

日常を謳歌している、まあ大学受験が迫っていると言う事もあつて謳歌し切れていないかもしれないが、それでも謳歌している18歳の何処にでも居そうな若者さ。

特筆して良い所もなければ、悪い所もない。

強いて上げるのなら、歌が上手いと言う所だけ。

いや、我ながらこれ自慢になるんじゃない？ と思っているのだが、これでも最高得点は99だ。

まぐれかもしれないが、それでも記録は記録。だからこれを上げて見たのだが……。

まあそれはさて置き、今俺が置かれている状況を確認してみよう。いつまでも現実逃避はしてられないからね。

俺は今、寝ている。

最初に俺の目に飛び込んで来たのは、知らない、見た事もない天井だった。見た感じ、硬質なのは無論、大理石の様に綺麗で汚れ一つない天井だ。

それから俺の寝ている床も同じ材質で出来た床だと認知して、上半身を起こせば、此処が何処なのかを知る為、周囲を見回したが、それでも全く知らない場所だった。

(……誘拐でもされたか、俺？)

有り得そうな可能性を思考してみる。

しかし俺は確実にベッドで寝ていたのだ、勿論自宅の。と、言う事は誰かが忍び込んで俺を抱き上げて誘拐したとも言うのか？

ないだろうよ。

誘拐はない線で話を進めよう。

（じゃあ此処は……——て、……これは？）

話を進めようとした瞬間、俺の目にある物が飛び込んで来た。

それは俺を囲む様に床に刻まれた円と、臍気に光る見慣れない文字。俺は試しにその文字に触れてみた。

（暖かい……）

手に感じる温もりは間違いなく光による物、つまり光は熱を発する類の光と言う事だ。

（蛍光灯じゃあなさそうだし……、何処ぞかの新発明の類か？）

文字に触れながら俺は思った。

しかし新発明なら新発明でこんな床に刻む必要があるのだろうか？ 床に刻まなければ機動のしない新発明なのだろうか？

（んな阿呆な、新発明にしては馬鹿過ぎる……）

床に刻む新発明？ ハンツ、此処はデイズ・ーランドのアトラクションか何かに使う物を発明する場所何ですかっの。

（じゃあ——）

何だこれ、と困惑した思考のまま少しでも情報を得ようと周囲に目を走らせて、数人のロープを纏う人影を確認出来た。

何、何、何これ。何此処、此処は厨二病患者の巣窟ですか？ 何ロープ何か着ちゃってるの、マジでうけるんですけどー。

とか言っているわけに行かなくなった。

俺が1人藻掻もがいていると、1人のロープを深くまで被っている人影が俺に歩み寄もよほってきて、跪ひざまずいてから、こう告げた。

「良くぞ、参りました。勇者様」

この日を境に、俺の現実はずつと270度方向転換し、呆気なく崩れ落ちたのだった。

その後俺はその男によって担ぎ上げられ、とある一室へと移動させられた。

一室は絢爛豪華とも呼べる程美しく、電気も小さいがそれでも装飾品により彩られたシャンデリア、床には赤絨毯が隙間無く広げられている。

窓一つない空間の様だが、一体此処は何処なのだろうか？

1人椅子に腰掛けて唸っていると、あのローブを被っていた男が対峙する様に俺の目の前に腰掛けた。

腰掛ける男に俺は目を向け、言葉を待った。

すると男は俺の瞳を見据えて、まずは頭を下げた。

「真に申し訳御座いませんでした、勇者様。強制召喚何てさせてしまいまして、こちら側の失敗です」

「へ、あ、あの……、えと、勇者様ってのは、俺の事……？」

これで領かれたら神様居ないだろ——「はい、それで御座います」神様は居ないみたいです、はい。

それから俺は矢継ぎ早に情報を注ぎ込まれた。

まず男曰く、唐突に巻き込んでしまっただけで申し訳ないとの謝罪。

女性曰く、俺は勇者として召喚され、勇者なのだからこの国を救って欲しいとの横暴。

男曰く、還る手段はまだ見付かっていないとの俺なら現実逃避級の一言。

女性曰く、俺はこの国の希望であり、この世界を平和にする為の願いとのまるで空想。

最後にリーダー的存在曰く、現在この国、トリエニスタ皇国は他国に侵攻されているので、それを食い止めて欲しいとの土下座。

ふう、さてさて……、これは俺の作り出した妄想か何か？
まず俺の脳裏に浮かんだのは何だこれ。いや、何だこれに尽きる
って言うくらい、何だこれって思ったね。

勇者？

還る手段がない？

希望？

願い？

救ってくれ？

何ぞこの展開。

テンプレ展開乙って言いたいね、これは。

何、何、何なの。これは。何この絵に描いたような物語の始まり
は。俺別に物語の主人公になりたいとか願った覚えは毛頭ないぜ？
それともこれは神様が俺に与えた試練？ いや、そうか、神様居
ないのか、仏か菩薩か。

俺はその日、その一室を貸して貰い、悩みに悩んだ。考えに考え
た。唸りに唸った。思考が焼き切れそうになるまで。

外で響く爆音や、激音を他所に俺の意識は現実世界の友人や家族
にあった。

突然居なくなった物だから、探しているのではなからうか。

結局俺は答えが出せぬまま、一夜を考え通しで明けた。

翌日、昨日のローブを纏っていた男達に連れられ、俺はある巨大
な扉の前に立たされた。

「此処は……？」

「此処から先はミアーシャルド姫様の父、トリエニスタ国王、
王妃の部屋、王の間に御座います。私達は会見出来ぬ為、此処から
先はお1人で」

「え、ちょ、王様の部屋って事かよ……、俺正装してねえぞ」

数歩下がり、俺の様子を見ている男達を傍目に俺はそう呟いてか
ら、深呼吸をし、王の間の扉に触れた。

ひやりを冷たい金属製の板。俺はそれを押し開ける。何だ、案外

軽いんだな、部屋の扉も。

中に入ると、その先には絢爛豪華、美しいの一言に限る巨大なシヤンデリアと、赤絨毯の敷かれた巨大な部屋が俺を待っていた。

「汝が召喚された勇者か？」

瞬間、俺の背筋に悪寒の様な物が走った。

俺はその声の主である、紅と金色二色で彩られたマントを纏う男へと視線を向けた。男はまだ若そうで、30代前半と言った所だろう。

纏っている物もまたこの部屋に連なり豪華克綺麗な物。魅了し、惹き寄せる、それこそ男にとってはこの程度かもしれない王の如き服装。

俺はその声に少々戸惑ってから静かに頷いた。

「そうか、汝、名前は何と言う？」

「佐久間、敬一、です……、はい」

齒切れ悪く呟くと、男は「サクマ殿、か。ではサクマ殿、もう少し此方に寄って参れ」と笑み、手招きする。

俺は「はい」と応じてから歩み寄り、目の前で跪いた。流石に立っているのは権力の違いもあるし、悪いだろうよ、色々と。

「硬くならんでも良い。では聞こう、サクマ殿」

「は、はい」

「汝はこの国を、いや、この世界を救ってくれるのか？」

「……」

流石に簡単には返答出来なかった。この問いこそ昨晚俺の悩みに悩んでいた問い。

簡単に頷ける物なら頷いてしまいたい。この静寂が、沈黙が痛い。俺は顔を上げ、瞳を細めてから、俯き、再び黙り込んでしまう。こればかりはどう返答したら良いのか分からないのだ。

すると、俺の目と、王妃と思える、亜麻色のウェーブの掛かった長い髪をした、人を魅了する服に負けずとも劣らない美貌を持つ女性の隣に腰掛けている、金色の、夕日に照らされれば煌々と思える長い髪をした、黒と白二色のドレスに劣らない、美少女に確実に力テゴライズされると思える顔立ちをした姫だろうか？ 少女の碧眼が合った。

数秒の視線の交錯。

彼女は直ぐに俺を見詰めたまま柔和に微笑むと、口の動きだけで俺に何かを伝え始めた。

その言葉で俺は決意し、こう、答えた。

「はい、救います」

嗚呼、我ながら馬鹿——そう思いつつも、俺の心の中は俺自身に賞賛を送っているようで、何処か華々しい気分になったのは、俺だけの秘密である。

第01話 学びの後の睡魔襲来

窓の外で月が輝く夜。

与えられた部屋に備え付けられ一目で高級品だと分かる天蓋付きベッドで、俺は寝転んでいた。

「勢いで言っちゃったな……、まあ、何とかなる、かな……あ」
今更になって不安の波が押し寄せて来る。

当たり前だ。翌日には戦争の兵士として駆り出されるかも知れないこの身。

死と隣り合わせの生活が始まるのだ、しかしそれさえ乗り切つてしまえば何とかなる、だがそのそれを乗り切るのが難しいのだ。

「無能力者の俺に何が出来る……、嗚呼、魔法でも使えれば何とかなるんだが……」

勇者、英雄として召喚されたのに、これでは情けない。

俺は溜め息を吐いてから、取り敢えず所持品チェックに入った。

ポケットや、何故か持つて来ていたシオルダーバッグの中身をベツドの上にぶちまける。

「携帯、Workman、飴、ガム、メモ帳に、財布……、小説に、ペンに、充電器つて……、どれこれも無駄な物ばかりじゃねえか

……」

まさか武器になりそうな物が一つもないとは……、せめてカッターナイフでもあれば武器として扱えたと言つのに筆箱すら持つて来ていない。

俺、一体何していたのだろうか。召喚された日の俺を殴り倒して召喚される前に筆箱取りに行つて来いやつて言いたい。

本日二度目の深い溜め息を吐いてから物を片付け、再びベッドに寝転がる。

こんな情けない勇者が居てたまるか、舌打ちしてから俺はベッドからバネ人形の如く跳ね置き、扉のノブに手を掛けた。

これが俺の、勇者として、英雄としての偉大なる第一歩である。

まず言わせて貰いたい。

俺、良くこの世界の文字、読めるな、と。

今俺は、深夜まで仕事をしていた王に無理を言って王立図書館を開けて貰い、書物を読ませて貰った。

書物を読んで行く内に、俺は途轍もない恐怖に襲われる。

理由としては簡単で、まずは未知に立ち向かうと言う事。

未知程怖い物は無い。

次に戦争の数。多過ぎるだろうよ、戦死者数半端じゃないぞ……、これじゃあ命が幾つあっても足りない。

俺は書物を読みながら、持って来ていたメモ帳に大事な部分を書き綴って行く。

右手が腱鞘炎けんしやうえんになる事間違いないだろう。だが、だからと言って未知に未知のまま立ち向かうわけにはいかないし、情報を得ずにして他の事に気を配るわけにもいかない。

そして書物を読み耽る事数時間、メモ帳もそろそろ終わると言う位書き綴れば、俺の意志は還りたいと言うより、この国を、世界を救いたいと言う方向に変わっていた。

それはまあ致し方ないのか分からないが、この世界は秩序が無さ過ぎる。

俺達の暮らしていた世界は、法律や法則、常識が俺達を戒め、縛るからこそ秩序として成り立っていた。

だが、今俺の居る世界は秩序の成り立たぬ、それこそ不可思議な法則の跋扈する非常識な世界。

そんな世界で戦争が何度も巻き起これば、世界自体が消滅する可能性もある。

そうはさせない、させるわけにはいかない。

勇者として、英雄として召喚されたのに、何も出来ずに死んで天国へ、何て言うわけには行かないだろう。

俺がこの国の、世界の希望、願いだと言うのなら、希望に、願いになってやろうじゃないか。

託せよ、その思い。

出来る限りだが、やってやろうじゃないか……。

読み続ける事、明朝。

結局朝まで読んでいた俺が得た答えは？ 還らない？ のでは無く？ 還るわけにはいかない？ と言う事。

次にこの世界の主力は魔力だと言う事。

魔力は魔法を成立させる為の元素であり、例えるのなら電気。携帯を魔法、充電器を自然干渉とするのなら、だが。

魔法があれば、俺でも戦える。だが、今から学んでは遅い。

ならば剣術、いや、体術か？

何れにせよ今から学んでも遅くは無い。

「善は急げだ……」

俺は本を全て棚に戻してからメモ帳をポケットに、ペンを胸ポケットに納めてから駆け出した——いや、駆け出そうとしたのだが……。

「あれ……？」

ぐらり、と視界が揺れた。

歪んだ世界。

力を失った両足はもつれる形で抜け、そのまま俺は倒れてしまう。

「……睡眠、不足、ってか……？」

最後の言葉とでも言う様に俺はそう呟いてから、
瞼を閉じ、眠り
へと落ちたのだった。

第02話 全てをぶち壊す程の能力

気付くと、何時の間にか俺は公園のと真ん中に立っていた。

「は……？」

そう公園だ。それこそ子供の頃だが、泥だらけになるまで友人達と遊んだ名残深い公園。

しかし何故公園に俺は居る？ 確か俺は王立図書館で睡魔に負けてぶっ倒れたハズ……。

「ほう、久方振りじゃのう。汝の様な人間が此処を訪れる等」

と、1人悩んでいると背後から掛かる声と、金属の擦れる音に振り返った。

其処にはブランコを1人漕ぐ、ゴシック調の黒いドレスを身に纏う、白銀の長い髪を持つ少女が居た。

「汝、何故此処に来た？ ちと此方に来て事情を説明してくれぬか？」

少女はブランコを漕ぎながら、俺を片手で手招きする。

「説明って……、じゃあそっちにもこの場所の説明、して貰うからな」

「良からう」彼女はそう頷いてからブランコを止め、降りる。

俺は彼女へと歩み寄って、懇切丁寧に召喚された事から説明した。俺が勇者だと言う事、俺が世界の国の希望だと言う事、もう直ぐ戦争が巻き起こると言う事。

全て洗い浚い説明した。

すると彼女は面倒臭そうに額に手を当てて深い溜め息を吐いてから「何時の時代も人の世は……」と嘆いていた。

「で、今度はそっちの番だろう？　此処は一体何処なんだ、アンタは一体誰だ？」

矢継ぎ早に尋ねる俺に彼女は「待て待て」と言ってから「順を追って説明する」と苦笑を零した。

「まずこの居場所じゃが、此処は童の世界であり、居場所。用は汝の意識の世界の中の一部じゃな。其処に童は暮らしておる」

「俺の意識……、公園？」

「そうみたいじゃな。汝がこの公園を思い浮かべたのは、きっと還りたいと言う念がその時は強かったのであろう」

1人頷く彼女に俺は納得して頷き返してから「じゃあアンタの名前は？」と尋ねた。

「童か？」彼女は首を捻ってから「童は神故、名前等はない」と笑った。

「……は？　何、はい、何て言った？　もう一度」

「ん？　童は神故、名前は無いと言ったのじゃが？」

「……」

待つてくれ、神様？

どうして俺の意識の世界に神様何て言う超高位存在が居る？　あ
るえ、俺、神様何て宿してたの？

可笑しいな、前お被いして貰ったんだけどな……、流石に神様までは被えなかったのかな？

1人黙々と唸っていると、彼女は「其処まで悩むでない。童の事は君、でも、アンタでも良い。様付けなど持つての外じゃ。堅苦しい」と俺の肩を二度叩いてから頷いた。

「そう、か……？　じゃあ、名前、考えて置くよ。流石にアンタとか君じゃあ面倒臭いからね」

「名前……、そうか、有難う。期待はして置こう」

クククと笑う彼女には唐突に笑みを納め、俺を見詰めてから歩み寄って来た。

「どうした？」

「汝、何を隠しておる？」

「隠、す……？」

いや、別に何も隠してませんけども……、マジで。

「何じゃ、気付いておらんのか……」

「気付く気付かないって言う物なのね……」

「うむ、それじゃあ教えてやろう」

「嗚呼、何を俺が隠してるって？」

「能力じゃよ」

「……は？」

待て待て待て、今変な言葉が聞こえたよ？

はい、もう一度。

「うむ、汝は能力を秘めている。目覚めさせてくれよう」

「ちよ、待——！！」

唐突突如過ぎる！！ 待て待て待て待て待て！！！！

まあ待つわけ無く、彼女は俺の頭を掴み、告げたのだ。

「？覚醒めたいよ？」

鼓動が一際高く脈打った。

「な、にを……！？」

高く脈打つ鼓動に驚きながら、俺は彼女を一瞥する。

「何、能力を目覚めさせてやっただけの事。少々痛みは伴うかの」

「て、めえ……っ、っう……？！」

同時、胸を刺す様な痛みが走る。

俺は驚きつつ胸を抑え、悶えた。喘ぎ、叫ぶ。

「っ、あっあああああッ！！！！！！」

全身が焼かれる様に熱い。

胸が貫かれた様に痛い。

声は喉から、枯れた声として出て行く。

「そろそろじゃの……」

目の前には腕を組んで俺を見守る彼女の姿。

刹那、痛み、熱さが瞬間的に消えたのだ。

俺は閉じていた瞳を開けて、頭を二三度振ってから「今のは……？」と尋ねた。

「今のは能力を目覚めさせた際には必ず起こる反応よ。汝の能力は見た所、最もタチの悪い能力じゃ」

「タチの、悪い？」

上半身を起こし、立ち上がりながら首を傾げた。

どんなのだし、あれか、闇とかか。それとも何でもありのチート能力か？

デイドリーム・クリエイター デイノスフェル・デイスティヴァー

「？創始創造？と？不死身躯？。何でも創造可能、創始創造者としての能力と、絶対に死ぬ事はない、歳を取っても何処かでも止まってしまう不老不死の能力。最もタチが悪いじゃろ？」

「タチが悪い悪くない良い良くない以前に全てをぶち壊す程のチートじゃねえか！！」

てか何だ、不老不死。俺、死ねないのかよ！

死ねないのは色々と勘弁だぞ、シリアスで感動シーン生き返って潰しちゃったらそれこそ能力恨むぞ畜生！

「確かに、の……。じゃが、それが汝の中で眠っていた能力故に、変更は不可能なのじゃ」

「マジかあ……」

此処までタチが悪いとは思っていませんでした、まる。

まさか全てをぶち壊す程のチート能力が俺の中に眠っているとは思っていませんでした、まる。

結論、更に死ねないとなると俺、乙じゃね？

「然しの、汝。その能力は思った物が創造出来る故、宝具を創造し放題と言つのも利点であり、創り過ぎると痛い目に合うと言つ欠点も持つ良い能力じゃて。後は何時の努力次第じゃ」

言われた途端、眩暈に似た感覚が俺を襲う。
再び揺れる視界。

世界が歪んでいく。まだ、まだ聞きたい事が――！！

「汝の真名も教えておこうかの……、汝の真名は――」

倒れ付す俺にそう続けて呟く彼女の姿。

嗚呼、俺、このまま死ぬのかな、とか思ってしまう。
今までの事、夢だった、妄想だったんじゃないか？ とか思ってしまう。

嗚呼、眠い。

眠い……、其処で俺の意識は途絶え、瞳を閉じた。

「――様――！――様――！」

「どうだ、勇者様の様子は？」

「い、いえ、まだ……」

此処は、何処だ？

ぼやける視界の先に居たのは、淡い紫混じりの銀色の長い髪に、
まるでラピスラズリを思わせる紫色の美しき瞳をした、可憐なる美
少女。

そしてローブを被った俺を召喚した方々。王様も、王妃も、姫様
も来ている。

て、起きなきゃマズイよね、これ。

俺は瞳を開け、上半身をゆっくりと起こしてから「心配掛けまし
た」と呟いた。

すると一気に俺を召喚した方々や王様、王妃は安堵の息を吐き、それぞれで「良かったなあ」等と呟き合っている。

だが、あの可憐な美少女と、姫様はそうは行かなかった。

「し、心配したんですからねっ!!」

「そうだぞ、来て早々死んで貰っては困る」

腰に手を当てて、ちよつと涙目で叫ぶ可憐な美少女と、呆れた様な溜め息を吐く姫様。

俺は苦笑をして「いやいや」と呟いてから「まさか魔法の本、世界の歴史とか読んでたら朝になるなんて思ってた無くてね」と苦笑した。

「体調管理はキチンとして下さい。じゃないと門限付けますよ?」

「オイオイ、エリシアよ。それは流石に可哀想だろう」

門限で、俺は小学生ですか、おい。

「で、ですが姫様」

エリシアと呼ばれた女性は姫様に宥められながら戸惑っていた。

「彼とて、此方の生活に馴染んでいないだけ。慣れれば寝る時間も分かるようになるだろう」

それに対して姫様は冷静に、そう微笑みを交えつつ頷いて、彼女を宥め続けていた。

するとエリシア、と呼ばれた彼女は落ち着いたのか「はい」と頷いて俯いてから、突如「あ」と呟いて、俺に向き直って微笑んだ。

「私はこの城のメイド長を務めるエリシア」エルキューアーズで御座います。ケイイチ様の身の回りの世話は私がやります故、無理はなさらないで下さい」

「あらら、メイドさんだったの……。だからか……。ん、待てよ……」

身の回りの世話? 身の回りの世話ね……。ふむ。

「どうかなさいましたか?」

「いやね、ちよつと考え事してただけ。まあ良いさ、これはまだ改善の余地が居る」

「は、はあ……」

戸惑いつつも頷くエリシアに俺は苦笑して「気にするな」と微笑んで置く。

すると次に姫様が俺の目の前にやって来て、妖艶に笑みを浮かべてから「この国の姫である、ミアーシャルド」アクティア「トリエニスタだ。宜しく頼む」と告げて来た。

まるで宣戦布告みたいだな、そう思いつつ俺は苦笑して「嗚呼、宜しく、御姫様」と頷いた。

さて、と呟いてから俺はベッドから下り「さて、エリシア達は1度部屋から退室を願います」と告げる。

「何故です？」

疑問の声を上げるエリシアに俺は意地悪な笑みを浮かべて「俺の裸、見るつもりか？」と尋ねて見る。

「——ッッ……！！ 失礼しました！！」

するとエリシアは豪速の勢いで姫様を連れて出て行きましたとさ、いやあ、初心だねえ。

俺は苦笑しながら着替え始める。

まあ着替えと言っても今まで着ていた物に着替えるだけなのだが……。

「さて……」

黒のTEEシャツに黒のスキニージーンズと言った動き易い格好に着替え終えた俺はベッドに腰掛け、天井を仰いだ。

そして両手を目の前に持って行き、握ったり開いたりを繰り返す。

能力ねえ、特に変化は見られないんだけど……。

ふむと唸ってから、手を投げ出し、まと呟いてから「どうにかなるでしょ」と苦笑を零した。

しかし、どうにかならないのが現実であると、俺は改めて知る事となる。

この世には、どうにかなるの常識が通用しないと言う事を、改めて俺は知る事となったのだ。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n0581z/>

The Creator—終焉のラグナロク—

2011年12月2日02時47分発行